

佐伯史談

第二〇八号

「郷土史研究」誌
通算百三十号

昭和五十二年三月廿八日発行

佐伯史談 会

事務所 佐伯市大字稻垣宇龍護寺村柴方

主張

眞実を知ることに

——羊頭所感——

佐伯史談会
会長 高木 嘉 吉

郷土史の研究を志して、眞実を知ること念じている。眞実を知るには、実地を探訪して見聞せねばならない。

佐伯史談会は昨秋の研修の旅に、瀬戸内海の大三島を訪れた。探訪前の想像では、着船地の宮浦は、鶴見所の松浦か、大入島の荒網代ぐらゐの漁村であり、大山積神社は五所明神か、若宮八幡ぐらゐの神社と思つていた。

ところが宮浦は、佐伯市の中心部に近畿するぐらゐの所であり、大山積神社は神域広大、社殿豪華な神社であるのに先ず驚いた。これは大きな神社のない佐伯地方に生活している筆者の、井戸の中へ蛙の驚きであつた。

さらには空物館に入り、陳列された三メートルを越える大刀や、数十領の鎧の豪華けんらんさに眼をみ及ぼした。実地を見聞せねばならぬことを痛感した一例である。

しかし、探訪には限度がある。どこにでも行けるわけ

ではない。その上実地にに向いたとしても、果して眞実を知ることが出来るかについて、大きな疑問がある。たとえ中東に戦乱が起つていゝとして、現地に出かけた私が、果して眞実を果して見聞することが出来るだらうか。「戦線五十里、兵百丁」は奉天戦のやや誇張された形容である。もつと広大な戦線に多数の軍隊が展開している時、

日本から飛来した民衆は、右往左往するばかりで、その一部を見聞することが出来たら上々である。全体を果して見聞することなど、どうして望めないことである。

そこでつてを求めて、兩軍の司令部で、既備の戦況を聞いて、地図の上で大体の反

あくと、いふことにならぬが、それも實際には出来ない相談である。

本号の内容

- 主張 眞実を知ることに(高木嘉吉)
- 一 論説 古久保土へのいふ(御手虎西)
- 二 一 下南朝の序にかえて
- 三 研究 豊後國司の居館調べ(佐藤貴一)
- 四 七 界 蒲江八景について(村柴弘)
- 五 九 堂書 瀨州佐伯村おぼえ書(天野徳宗)
- 六 二 (第十七佐伯河内郡小史)
- 七 七 巻 ながふるさと元田徳(市野藤子)
- 八 二 五 丸録 鶴見明神寺小座敷(安部)
- 九 二 五 学書 藤原宗神と妻屋(安部力)
- 一〇 五 間書 西御旗幸余談(浪谷俊次)
- 一一 五 源 陽平温泉記(出田善市)
- 一二 五 佐伯史談文化財保存会の運賃
- 一三 五 外会計報告書

こうして現地に飛んだ私は、得る所なく帰国することになる。これは会員の誰が行っても大体同じことであるう。

さて、現実のこととしては、無能な私達が行かなくても、報道機関の専門家が、あらゆる手を尽くして、迅速に報道してくれるので、ラジオ・テレビ・新聞などによつて、居ながらにして知ることが出来る。文明の育難さである。

しかし、報道をうのみにすることは危険である。主体性を確立して、批判的に読むことである。中東の地理・民族・歴史等に關する知識を批判の基準にして――！。この主体性を確立するため、私達はもつと勉強せねばならない。

まず史書を讀むことである。史談会の研修も、世界史・東洋史・日本史の流れの中に、郷土を見る段階に達しているわけである。次に地理書を、いつ、どこで、誰がの中で、どこ、がはつきりしていないと、史書を讀んでも興味があかす、効果も半減する。地理を知るには旅行することが一番よいが、やはり限界があるので、讀書で補う外はない。

私は主体性を確立することによつて、郷土の史実・史跡・文化財などについて、正しい解釈をすることを目指したい。

新春の初歩きに、史談会は渡町(まほろ)の宝劔山に登ったが、色々なことが考えられる。佐伯地方に古墳がほとんど無いことは、古墳時代の郷土の文化の低かったことを物語るものである。宝劔山上の盛り土を円墳の跡と見れば、それは郷土の貴重な文化財である。

円墳の中から掘り出された石棺の石槨を使って、石の祠が出来ているが、この石の祠を作った人々の、素朴な

信仰心をうれしく思う半面、石棺の解体されたことを惜しむ気持ちもやいて来る。円墳に祀られていた人及、古墳時代に郷土を支配した豪族と思うが、それを解明するすべもない。

宝劔山に登る道の古手に墓地があり、五輪塔を交えた十余の古い墓がある。由緒あるものと思ひながら解明出来ずにいた。たまたま近々の岩崎カメラ店の店主人に会い、その墓地のことを話したところ、それは自分の祭っている墓地だとのことと、意外であった。人の集まった席であったので、詳しいことを聞くことが出来なかつたが、後日色々尋ねて見たいと思つている。

宝劔山は一列にすぎないが、温故知新の道遠くはるかなるも感ずる昨今である。今年も会員諸氏と手を携えて、この道を進みたいと思つている。

小言

すずめ百まで

これはいろはがるたの文句で、たしかそのつぎは「おどりを忘れず」とつづいて、その真意は、こどもころはピンと来なかつた。しかし、今になって思ひ、今の言葉でいって、生涯教育も生涯学習のことではないかと思つている。

毎朝読む新聞、毎晩見るテレビ、なんと知らないことの多いことよ。大へ専門的なことは、専門家に任せ、学問的なことは学者に

任せるとしても、私共の日常生活はつなかることは、積極的に取り組むべきである。

史談会員は、またもつと意欲をもち、積極的に勉強しなくてはならない。水がたまっているとボウフラがあく。知識の停滞は、年寄りにホケルという現象をもたらす。

若い人でも同様、週刊誌程度、テレビの娯楽番組だけで毎日過ごしていたら大変である。

「あいつはいつもテーマをもち、何かと勉強している。」
そうありたいものである。(預)